月刊　第194号　平成23年4月20日　（昭和61年10月30日第三種郵便物認可　郵－第2039号）　1部500円（毎月20日発行）

語る・かたる・トーク

いま、できることを。

これからも、私たちにできることを。

横浜国際人権センターからのメッセージ
原発に甘えていた日本人― 森島吉美
ドイツから日本の友人へ― エルケ・ミッツラフ
深刻！　悪臭と騒音・水不足 阪神大震災の被災体験から―田村正男
あなたは、独りじゃない―倉田 哲
大地震と放射能汚染―三谷 誠
ヒロシマ・びわこ・信州・ひょうご・山梨ブランチのレポート

東北関東大震災　特集号

物心両面の支援を継続しよう

◆私のひとりごと◆

◆あれ、地震かなと感じた次の瞬間激しい揺れが襲ってきた。

悲鳴をあげて席を立つ人、慌てて外に飛び出そうとしたお年寄に私は、叫んでいた。「外より中にいる方が安全だ……」と。

三月十一日（金）午後二時四十六分東北・関東大地震が日本列島を襲った。

◆私は当日神奈川県庁で会議を終え、友人と昼食をすまし横浜駅から相模鉄道に乗車した。

電車が「希望ヶ丘」駅を出発する間際のできごとであった。激しい揺れに駅舎も、プラットホームの屋根も不気味な音を発しながら大きく揺れた。随分永い時間のように思えた。どうにか揺れが治まった、直ぐ様家と事務所に電話をしたがすでに電話は繋がらなかった。メールを打って見た。どうにか送信することができた。しばらくして返信がきた。家族も家も、事務所もスタッフも安全とのことである。「ほっと」した。何とも言えぬ安堵感であった。時計を見たら午後三時三分であった。

車内放送があり、全ての点検実施のためしばらく時間が掛かるとのことである。発車は五時頃の予定とのことであった。二時間後には電車が動くと聞き少し安心した。とその時又もや大きな揺れが襲ってきた、二度目のこの揺れは先程の揺れと比べると時間は短かった。但しその後の車内放送で電車の出発は時間不明との説明があった。

◆電話が通じない、メールも送受信が困難となった。情報が入手できない。震源地が何所なのか規模がどれほどなのか、知りたいことへの思いがどん〳〵強くなる。近くにいた女子高生の話し声が耳に入ってきた。観測史上最大とか宮城県沖とか、私は彼女達に話を聞いた。震源地は宮城県沖でマグニチュード8・8（後に9・0に訂正）で観測史上国内最大とのことであった。津波についてはこの時点で私は知らなかった。

◆動かない電車の中で家に帰るための方法を考えていた時、車内放送があった。午後六時に二駅先の瀬谷まで動かすとのことであった。六時過ぎ瀬谷に到着した、これから先は運転の見通しは無いとのことである。何はともあれ家と連絡をとりたいと思い公衆電話を探した。駅構内に電話が一台、しかも利用する人が長蛇の列をなしていた。何時来るかもわからないタクシー乗場にもひと、ひと、ひとの列である。

◆関東大震災が起きたらどのようにして帰宅するかが問われていたが、今回の震災は正にその問が現実となった。主要道路は大渋滞となり、ホテルは全て満室であった。コンビニの棚からは、パンと弁当が一番最初に姿を消した。それと携帯電話用電池も早くに売り切れた。当センターのスタッフも事務所に宿泊する羽目となった。

ちなみに私も家に帰り着いたのは、地震発生時から九時間後の十二時前であった。

◆今回の大災害を経験して私が一番強く感じたことは、日本人の秩序立った行動である。駅構内の人の動き、混雑する道路を歩く姿、タクシー乗場で整然と並ぶ人々、声を掛け合う人達、優しさが行動に出ている人の姿を多く目にすることができた。

人間窮地に立った時にどのような行動を取るかは大きな関心事である。国民全体の行動がどのような姿を見せるかは勿論のことである。一致団結して秩序立った行動が取れることこそが知的集団としての人間の真価を発揮する行動であると言える。そこから生まれる現象が、優しさであり、思いやりであろう。他人を大切にする心、人命を大切にする心即ち人権感覚が備わった心が大切であると言える。

杉とう・じゅんすけ

表紙／題字　石川（いしかわ） 九楊（きゅうよう）氏

横浜国際人権センターからのメッセージ

被災者への　熱い思い達よ、集まれ

熱い思いを、ずっとずっと
息ながく持続していこう

更に力を寄せて

―いま、できることを―

「国連ＮＧＯ　横浜国際人権センター」は、発足以来「人権一筋」に活動してきました。人権の基本は「ひとの命」です。

この度の東北関東大震災では、無数の「ひとの命」が奪われました。無数の「ひとの命」が傷つけられました。ひたすら、悲しい限りです。

テレビの実況画面を通して、観る者の心にも深い悲しみが突き刺さります。かけがえのない「ひとの命」が、恐怖、不安、絶望の波に飲み込まれそうな状況です。

「私にも何か出来ないか」
「私も何かやらなければ」
「私も何かやりたい」

焦燥感にも似た感情が沸き起こってきます。

地震、津波、火災、その上放射能の恐怖と続く圧倒的災害。これは、被災者だけが引き受ける問題ではないでしょう。私たちみんなの問題だと思います。

日本国内だけではなく、世界各地から激励のメッセージが寄せられています。さまざまな支援活動の動きも報じられています。人種、民族の違いを超えた取り組みです。「ひとの思い」は世界共通です。

横浜国際人権センターも、全力を挙げて支援活動に取り組んでいます。全国各地のブランチでも、既に、それぞれの取り組みを行っています。

みなさん、長期戦です。力を合わせて、この厳しい状況に立ち向かい続けましょう。

写真／南三陸町防災庁舎

いま、できることを。

ヒロシマブランチ
事務局長　辻駒　啓三

大地震を報じる臨時ニュース。刻々と流れる被害は凄まじい。津波の映像は恐怖を伝える。

震災直後、連日、報道されたニュース映像に言葉を失った。映し出される巨大津波は想像を絶するもの。

そして被災地に追い討ちをかける原発の大惨事、被爆地ヒロシマの心が痛む。

記者のインタビューに「親戚や知人のことが心配です。」そう語った男性。さらに記者が、「あなたのご家族はご無事ですか?」の問いに、「妻と子を喪いました。」と答えた。

最愛の家族との別離を越えて、知人を思いやる姿に、胸が熱くなった。

「いま、私にできることは」そんな思いに駆り立てられる。先ずは、ブランチとして義援金を呼びかけた。

「何か出来ることはないかと思っていました。協力します。」電話のむこうの声は温かい。

メールでの呼びかけに、「呼びかけありがとうございます。一緒に取り組ませてください。」心のこもったメールが返ってきた。

「こんな時に不謹慎ではないかと気が引けたのですが、義援金コンペに切りかえ、参加者も快く賛同してくれました。」ゴルフ仲間からの電話、やや遠慮がちに伝えてきた。

たまたま、横で義援金の呼びかけを聞いていた知人は、「ボクらも何かできないかと思っていたんです。店でやらせてもらっていいですか。」と、さっそく経営する居酒屋3店舗で、義援金を募っている。

ほんとうにありがたい。

みんな何かできないかと、きっかけを待っていたようだ。それぞれのやり方で支援の輪が広がっている。

これからも、ヒロシマブランチの小さな営みは、心と心を繋ぎながら息長く続く。

ヒロシマの心よ届け。

居酒屋「ずいたれ」も義援金募る

「慈悲」の心

びわこブランチ理事
真明寺住職　佐々木　理信

東北関東大震災の日、滋賀県南部地域でも長い揺れがありました。

阪神淡路大震災から十六年。

あれより大きな地震が起こるとは。テレビから離れられず、この世の地獄を思わせる悲惨な被害の画像に三日間、涙流すばかりでした。

宮城県石巻市の友と家族の安否情報が全く入って来ません。

翌朝、無事を知り、びわこブランチの仲間たちと共に安どしました。

一週間後、石巻の友から支援物資の要請がありました。歯ブラシ、歯磨き粉、消毒液、ティッシュなどでした。

即座にびわこブランチの仲間と連絡を取り、つながりのある方々にもお願いしてもらって、徐々に支援物資が集まりました。

支えあう仲間に感謝感謝

石巻の友は僧侶です。

「寺の裏山に逃げて、本堂の方を見たら、山門が既に流出して跡形もなく、本堂も津波の運んできた瓦礫によって、ひどい状態になってしまった」とのこと。

その瓦礫の下には、まだ沢山の人が横たわったまま。これから、まだ辛い悲しい時を迎え、過ごすことになるのでしょうか。

友人が語ってくれた惨状に、電話を切った後、しばらくは心が沈みこんでしまい、立ち上がることが出来ませんでした。

『親しい人であってもなくても、困っている人に物を与えることは、仏のいう慈悲である。』

浄土宗宗祖、法然上人の言葉です。

慈悲をもって被災された方々に功徳を行いましょう。（合掌）

復興へ春よ来い

信州ブランチ
代表　砥石　信

世界でも最大といわれる東北・関東大震災。大自然の脅威。

地震・津波、そして放射能汚染という多重災害。多くの人たちの尊い命が、奪われた。

生き延びた人たちも、家族を失い、家を失い、ふるさとを破壊された。それでも、じっと耐え忍ぶ人々の姿と人間力に心をうたれる。

そんなニュース映像をみながら「なにかしなければ！」と仲間に連絡をとり、話し合う。

そんな時、ヒロシマブランチの義援金の呼びかけを知り、信州ブランチも義援金の呼びかけを始めた。

信州ブランチの地元長野県の北部でも地震災害にあった畜産農家が仲間の知り合いにいることを聞かされた。

長野を襲った地震で家畜小屋が倒壊。多くの牛や豚などの家畜が死に、その処理すら出来ずにいると聞かされた。

小諸市で開かれた家畜市場で義援金を募る。

「あんな災害を見たら、なんかしなくちゃいけねぇや。」

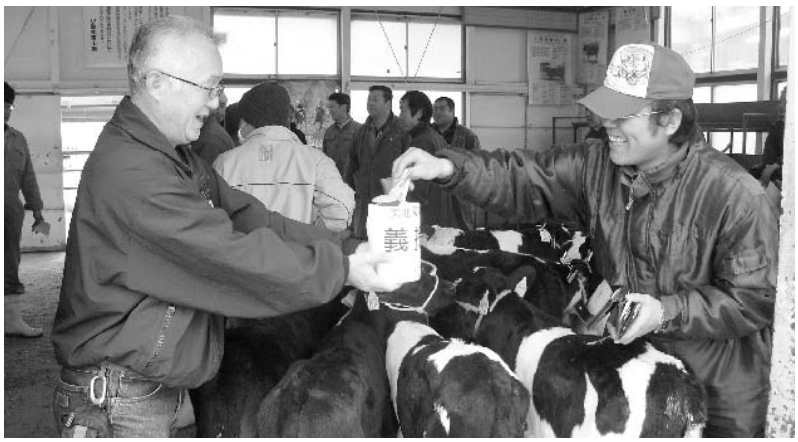
「あんまし寄付できねぇけど。」

そう言って、さし出すごつごつした手は優しい。目頭が熱くなる。

東北・関東大震災。そして直後の長野県北部震災。これからの復興に少しでも力になりたい。

この記事が発行されるころ、信州にも春が来る。

復興へ踏みだす、春が来る。



来県された避難者に積極的な支援を

山梨ブランチ
代表　横山　隆史

東日本大震災を受け、山梨県内に身を寄せる被災者や原発事故の避難者が増え続けています。

三月二十三日の時点で五八〇人とのことですが、今後ますます増えることが予想されます。

山梨県では一時避難所を開設したり、公営住宅の一部での入居受け入れをはじめました。

市民と行政が力を合わせ

受け入れははじまりましたが課題もあります。特に身寄りや財産のない避難者、心の支えを求めている方には、まだ不十分だと思われます。

先日、ある市の市営住宅に入られた方が、私の関わるフードバンク山梨（生活困窮者に食料を提供する市民団体）に支援を求めてこられました。

所持金が七十円しかなく、家族の食料を買うお金もないとのこと。行政も、もっときめ細かな支援を行う必要がありますが、私たち市民も、行政任せでなく各自ができることを積極的に取り組むべきでしょう。

生きる権利保障する支援を

横浜国際人権センター山梨ブランチは、避難者支援を、「人の幸せに生きる権利」の保障と捉え、人権を守る活動の一端として取り組んでいます。

被災者のみなさんの受け入れと支援は、長い取り組みになることが予想されます。生きる権利を保障するという観点から、被災者へのきめ細かい配慮と敬意を払った支援が必要です。

本県を頼ってこられた避難者の方々の生活と心の支援を、これからもささやかですが行っていきます。

「ひょうごブランチ」立ち上げ

絆を大切に支援行動

ひょうごブランチ副代表
階戸　孝之

「ひょうごブランチ」を立ち上げた。集まったメンバーはとても個性的。

メンバーは、阪神・淡路大震災や日本海タンカー事故、佐用町の豪雨災害では被災の立場だった。そして、被災の立場であると同時に被災地の支援も行っている。阪神・淡路大震災では炊き出しボランティアとして、タンカー事故では海岸に打ち寄せられたオイルボールの除去活動、豪雨災害では復旧支援を取り組んできた。

これまで個々で活動してきたのだが、それゆえの非力さを感じていた。人権などの社会問題を解決していくには、ネットワークも必要だとの思いを抱いていた。

そんな思いから、東北関東大震災の義援金活動を契機に、同じ志を持つ仲間が集まり、「ひょうごブランチ」を立ち上げた。

かつて、阪神・淡路大震災からの復興では、人と人との「絆」はかけがえのない原動力だった。

だからこそ「ひょうごブランチ」は「人の絆」を大切にした活動をめざしたい。

できることを、
できるところから、
できる人がする。

社会を変えるのはそんな行動力と「絆」だ。ひょうごブランチは、これからも「即行動！」をモットーに、熱い思いで、走りまわり飛びまわりたい。

がんばろう、東北。
がんばろう、関東。

横浜国際人権センター本部に、多くの賛同メールを戴きました。一部を紹介します。

「自分に出来る事をやろうね」の言葉

神奈川県　H・N

早速、ささやかですが協力させて頂きました。
私は、中学生の時、移動教室で勉強した一人です。つたない私の感想文を「語るかたるトーク」に乗せて頂きました。あの時、「何でもいいから、自分に出来ることをやろうね。」という言葉は、今もしっかりと心に生きています。

「ゆいまーる」の心を届けよう！

沖縄より　Y・T

「ゆいまーる」は沖縄の言葉。「助け合い」を意味しています。
心配していた友だちと、やっと、連絡がついた。「情報が飛び交って何を信じていいか分からない」と話す声は涙声。でも、無事でよかった。
私にできることは、希望と復興を祈ること。「ゆいまーる」の力を繋ぐこと。震災の翌朝、職場で義援金を提案。快く賛同してもらえた。あったかい心が嬉しい。
これからも、沖縄から「ゆいまーる・助け合いの心」を届けます。

復興へむけ出来ることから

神奈川県　T・T

地震の凄さは、今も船酔いしたように体に残っています。ボランティア休暇を活用して、私に出来ることを行いたいと思います。
横浜国際人権センターで計画されるようでしたら、声を掛けてください

この子の未来へエネルギーの見直しを

横浜市　S・E

親子で話し合いました。命の尊さ、生きることの意味。
原発事故のことも話し合いました。この子の未来へ、エネルギー政策を見直すべきです。
娘は小遣いを募金しました。呼びかけにファミリーで賛同します。

支援を続けることが大切

神奈川県　H・M

「日本は今まで世界中に援助をしてきた援助大国だ。今回は国連が全力で日本を援助する。」国連のメッセージに胸が熱くなりました。世界の国々が、日本の復興にむけて支援行動をしています。
ボクは毎日、缶コーヒー１杯分を募金用にキープしています。節電も心がけるようになりました。支援を続けることが大切だと思います。

原発事故に自己嫌悪

東京都　S・T

原発事故によって、生活を奪われた人々。
福島原発が発電してきた電気は東京に暮す我々が使い、福島県民の方は使われていません。それなのに犠牲は地元住民の方々。そんな理不尽さと身勝手を思い、のうのうと過ごしている自分たちに自己嫌悪すら感じます。
だから我々が、復興へ最大の支援をするのは当然の義務だと思います。

深刻！悪臭と騒音・水不足

―阪神大震災の被災体験から―

田村正男

突然、東北地方を襲った地震と予想を超える大津波、それに加えた原発の事故――。数多くの生命を奪った地獄絵のような光景は、今も大きな傷跡を鮮明に残し、生死の岐路に立たされた何万という人びとは、恐怖と絶望の淵に沈んで途方に暮れている。

あの日から間もなく二か月になろうとしている。報道の面では「復興」「交通網の開通」「仮設住宅」「集団移転」の文字が目立つ。このために、多くの人は、事態は好転しつつあるかのような錯覚にとらわれがちであるが、絶対に、そうではない。阪神淡路大震災を体験した被災者の一人として、日がたつにつれて、ますます深刻になっているのではないかと思う。とくに、避難所にも行けず、半壊した家屋の片隅で身を寄せあって耐え続けている人びとは危機的な状況にあるはずである。

阪神淡路大震災の朝、私は起きていた。突然、青い光が見えると家全体が大きく揺れ、大型のテレビが三四メートルも吹っ飛び、本棚は倒れ、天井が落ち、柱が折れて家は傾いていた。気がついたら私は瓦礫の中にいた。家族とともに頭から毛布をかぶって夜明けを待った。やがて近くの駐車場に避難したが、集まってきた数十人の近隣の人たちの口からは、誰一人として「おはよう」の挨拶言葉はなかった。申し合わせたように「おお、生きていたか、よかった」だった。近所の何軒かの家が全壊して「あの人が亡くなった」「あの人も…」という噂が広がっていたからである。誰もが「生きている喜び」をかみしめ、激励しあった。災害は不幸なことではあるが、「生きている喜び」を心の底から実感させられた貴重な体験であった。

だが、それも束の間。私たちは多くの苦しみと不自由をしいられたのである。新聞やテレビで報道される避難所には救援物資が相ついで届き、ボランティアや医療の支援もある。自治体の対策は避難所生活者に重点がおかれ、瓦礫に埋まり、半壊した自宅にこもる人たちは放置されたままであった。今回もまた同じではないかという点が気がかりでならない。このような人の数は、かなり多いはずである。〝報道されない被災者〟の苦しみと悩みは深刻である。この人たちにこそ、今、早急に救援の手が差しのべられなければならない。

断水と停電。ガスも情報もストップして、水や食料の支援もない。私たちは〝買い出し部隊〟を編成し、隣りの岡山県や鳥取県内にマイカーを走らせて自給自足の方法をとった。この地に給水車が入ったのは地震発生から二週間もたってからであった。それは九州福岡市役所の給水車であった。テレビも見えない。新聞もこない。騒音と悪臭が、ひどい。一ヶ月ほどたったころから私たちの生活は死の寸前に近づいていた。

停電のために冷蔵庫の中の野菜や肉などが腐り、家じゅうに悪臭が充満する。処理しても悪臭は消えない。洗うにも水がない。頭がおかしくなる。倒れる人もあるが医者は来ない。やむなく空気のきれいな道端にビニールを敷いて寝かせておく以外になかった。

悪臭同様に、これもテレビには映らないが、東北各地の被災者たちは、限度を超えた騒音被害に悩まされているはずである。病人や怪我人が出たといって何台もの救急車がサイレンを鳴らして走りまくる。救援物資輸送車の先導と称して警察のパトカーがサイレンをうならせて、ひっきりなしに走り抜ける。それが深夜もかまわず二十四時間、毎日、ずっと続く。睡眠不足から体調をくずす人が続出するのは当然である。近所の病院や医院も半壊状態で、みんな閉鎖されている。

ヘリコプターの騒音。これはスゴイ。報道用のヘリコプターが災害発生直後に飛ぶのは仕方ないとしても、一ヶ月たってもヘリの騒音は消えない。いや、激しさを増すばかりである。はじめは、負傷者を被災地外の病院に搬送する程度だったが、救援物資を運ぶ自衛隊や消防のヘリが低空で飛びかい、窓ガラスをガタガタと鳴らす。会話は、ほとんどできない。その上に、時に、余震が襲う。

東北地方の場合は、多数のご遺体のために火葬の限界に達し、秋田や山形、新潟や長野など各県の火葬場へ空から搬送しなければならない。さらに、これからは仮設住宅の資材の運搬が本格化する。ヘリの数はますますふえ、騒音の被害は一段と増すはずである。もう耐えられない。

水不足。ペットボトルなどの給水は、ほんの一時の解消策にしかすぎない。給水車の水も、被害のひどい地域にかぎられている。これが問題である。私たちは半月も顔も洗えず、歯も磨けなかった。風呂にも入れない。約一か月後、プロパンで臨時開業した風呂屋の前で、毛布を頭からかぶって、粉雪の舞う路上に長い列をつくって順番を待ち続けたものである。トイレも流せず、汚物がたまったままだった。

被災者にたいして「がんばって！」と声をかける人が、よくある。しかし被災者は、もう限度を超えてがんばっているのである。そんな声よりも、一刻も早く具体的な対策を実施してほしいものである。

（元朝日新聞編集委員）

原発に甘える日本人

横浜国際人権センターヒロシマブランチ
代表　森島 吉美（広島修道大学教授）

原発事故

ぼくは原子力発電の門外漢である。

知っていることといえば、広島に落とされた世界最初の原子爆弾に使われたウラン二三五が原子力発電に使われているということ位である。今回の福島原子力発電所の事故を受けて、東京電力や政府が、詳細に事故の状況説明をすることによって初めて知ることがたくさんあった。

アメリカのスリーマイル原発事故（一九七九年）は、人為的事故であり、チェルノブイリ原発事故（一九八六年）は、構造技術的欠陥（人為的事故が重なる）によったとされている。そして今回は自然災害による事故。

地震、津波によって避難せざるをえない人々、そこに、原発事故によってさらなる避難を余儀なくされた人々、彼らは、いわれるままに、驚くほど冷静に、忍耐強く指示に従った。

政府の報道が正しいのだろうか？放射線の影響は「健康を害する」までにひどいものではないのだろうか？わからない。不安な気持ちはぬぐえない。

原発事故への世界の対応

国内の総電力量の八割を原子力発電に頼るフランスでは、原発事故に対する反応は早い。日本にいるフランス人は、帰国する。ジャーナリストに対してさえ、長居することをやめさせる。広島で開催予定だった「フランス印象派展」への作品出品を見合わせた（これは、彼らの常識に従えば、原発事故、震災によって国民がパニック状態に陥り、大事な絵画が無事である保障がないと懸念しているからだろう）。

アメリカにおいては、日本に対して、住民を八十キロ先へ避難させるように警告する。

彼らは原子力発電をこれから先も維持していかんがためにこそ、「国民を守る」ことを優先しているのだ。政策がはっきりしている。

ドイツでは、前政権（ＳＰＤ）時代、原子力発電をやめることを決断していたが、現政権（ＣＤＵ）は、その決断の見直しを決めていた。ところがこの事故を目の当たりにして、メルケル首相は、「日本のような優秀な技術を備える国ですら原発事故を抑えることにあれほど苦労している」と、記者会見の場で話し、すぐに原子力発電の維持に対してその方向転換を呼びかけ、原子力発電の総点検を始めた（古い原子力発電所においては二基永久停止）。彼女も国民に対して明確な姿勢を打ち出しているのだ。隣国中国も原子力発電計画の見直しに入った。

原発事故への日本の対応

一方日本に目を移してみると、三十キロがその避難境界。自宅（屋内）待避区域の人々は、地震、津波をかろうじて生き延び、その日の食事にも困り、その上、支援物資も、周りから近寄ることへの恐怖から何も届かない状態。風評被害というが、そんなことで片付けられる問題でないことは明らかである。

現に、放射線の量が異常に高い値を示している地域へ、たとえその量が、健康に影響がないといっても、放射線を浴びることが健康によくない以上誰も近づかないのは当たり前。ここが欧米の政府の反応との大きな違いである。

原子力発電をこれからなお維持するのであれ、廃止するのであれ、いづれにしても、国民の安全を第一に考えるという姿勢が足りないのがわが国の政府である。おとなしく、忍耐強く政府の言いなりに行動する国民をいいことに、この無策は許せない。

ひょっとすれば、放射線の危険度に関する政府の情報が正しいのかもしれない。それでも、政府の姿勢がおかしい。

広島からの発信

そもそも、わが国は、広島、長崎で原子爆弾の洗礼を受け、ビキニ環礁の水爆実験で第五福竜丸の船員が被爆した。三度の原爆の体験を受けてきた。

その国民がなぜこんなにおとなしく政府のいうままに冷静に落ち着いて行動できるのだろう。

地震、津波後の被災者の反応を世界は絶賛している。スーパーやその他の店舗に押し入り、物を持ち出したりする国民のパニック状態は欧米では当たり前である。こういった災害後に真っ先に出動するのは警察である。

しかし、その冷静な反応が原発事故に対しても同じであることに違和感を覚える。地震や津波は目に見える災害、放射線は目に見えない災害、災害には変わりない。それも現在進行形の災害である。それに対する反応があまりにも落ち着き払っているのが不思議である。

これは、被災者に限らず、被爆都市広島においてもみんな、驚くほど落ち着き払っている。

核に対する反応は、我々日本人であれば、「頭」で反応するのではなく、「感性」で反応するのが当然であるように思えるのだが。三度も原爆の被害にあった我々が心のそこから恐怖を覚え、二度と同じ過ちを起こさないと決意したそのときから、本当は、理屈ではなく心の底から核に反発することが、日本の常識であると、世界は考えている。

だからこそ、福島原発事故のニュースを聞くやいなや、ドイツの多くの友人が、「ドイツへすぐに逃げて来い」とメールをしてきた。のんきにテレビのニュースを追いかけている僕の態度を非難している。

「核抑止論」「クリーンエネルギー・原子力発電」この「頭でっかちの理論」を打ち破るのは原爆を体験してきた日本人ではないのか。代替エネルギーなんて、原発を完全廃止してしまえば、間違いなく我々には見つけ出せるだけの力があるはずである。下手に原発を持っているからこそ、「甘え」が生まれると思う。

「核と人類は共存できない。」その言葉の発信基地こそ日本であり、広島、長崎であるはずである。

ドイツにいる友人からのメール

ここ30年近く、ドイツのいくつかの都市との「青少年平和交流」を続けてきている。

その交流で知り合った友人が、［原発事故ニュース］を見てメールをしてきた。ドイツに住む友人たち、中国人、アルゼンチン人、韓国人、画家もいれば音楽家、カウンセラー、ジャーナリスト、教師もいる。メールから海外の「原発事故」に対する思考がみえてくる。（日本語訳は森島）。

（1）ドイツ（カッセル）との青少年平和交流を始めた、ドイツ側の僕の相棒シュテファン・ミッツラフの妻エルケからのメール。

Wir sehen sehr viel Nachrichten und Berichte im Fernsehen über Nord-Japan und diese große Katastrophe. Ist Akiko sicher? Wie sieht eure Situation in Hiroshima aus?

Werden Erinnerungen der Überlebenden der Atombomben mit dem verglichen, was zur Zeit im Norden passiert?

Die Bilder sind so schrecklich, die Nachrichten manchmal verwirrend. Die Bundesregierung hat ganz schnell heute 7 Atomkraftwerke abgeschaltet, 2 davon für immer, die anderen sollen überprüft werden.

Auch die über 100 Atomkraftwerke in Europa sollen überprüft werden. Nach einem Gespräch mit Denis heute früh hatte ich den Eindruck, dass die USA noch nicht so sehr ins Nachdenken über ihre Atomkraftwerke gekommen sind.

＜何度もテレビのニュースを見ています。東北関東大震災のニュースです。東京にいる娘さん、晶子は大丈夫ですか？ 広島の皆様はどうですか？

きっと被爆者はかつての原爆が投下されたあとの広島を思い出しているのではないですか？テレビで見る光景は恐るべきものです。ニュースがニュースにならないこともあります。ドイツ政府は、あっという間に、今日7つの原子力発電を停止し、そのうちの2基を永久停止にしました。他の原発は徹底的に検査されます。

ヨーロッパの100以上の原発も検査されることになっています。ハワイにいる私の息子との話では、アメリカはそこまでは考えていないようです。ある災害研究家は、原発の災害がどれぐらい真実味を帯びて起こりうるかが問題ではなく、今問題なのは、原発そのものが可能かどうかであると。そのことが論じられるときが来たと思います。＞

（2）昨夏、ドイツから高校生4人を招き、「ドイツの高校生のための広島ゼミナール」を開催した。そのときの引率教員ミヒャエル・ブラウアーからのメール。

Unsere Nachrichten informieren über eine wahrscheinliche Kernschmelze (wie in Tschernobyl) in einem Atomkraftwerk 200 km nördlich von Tokyo. Seid ihr darüber informiert? Ab Dienstag dreht der Wind voraussichtlich in Richtung Süden! Deine Tochter sollte Tokyo am besten schnell verlassen! Michael

＜ドイツのテレビニュースでは、チェルノブイリ原発のように、東京から北へ200kmはなれたところにある原発においてかなりの確率で核燃料の炉が融け出していると報道しています。

このことは日本でも報道されているのですか？火曜日には、風が、予報では南に向かって吹くということです。あなたの娘さんは出来るだけ早く東京を出た方がいいです！＞

（3）2009年「日・韓・独青少年平和絵画展」に出品してくれた画家キム・テジュンからのメール。

Wie geht es Dir und Deine Frau ? Ich habe grosse Sorgen auf Euch. Ich sehe jeden Tag die Nachrichten ueber den Erdbeben in Japan. Ich hoffe, dass es Euch gut geht und schnell wie moeglich alles in Japan wieder gut geht. Alles Gute! Dein Taejun Kim aus Korea

＜元気ですか？家族のみんなは元気ですか？あなたたちのことが気がかりです。

毎日ずっとテレビのニュースを見ています。地震、津波、原発事故。あなたたちが元気でいること、そして日本が可能な限り再び復興することを望んでいます。＞

あなたは独りじゃない

阪神淡路大震災の経験から

倉田　哲（神戸）

十六年前の記憶が・・・

今も鮮明に覚えている。

あの日の、あの朝の記憶が甦った。東日本を襲った巨大地震。被災の状況を伝える報道。体が震える。

十六年前の「あの日」の地震もそうだった。真っ暗闇の中、一体何が起こったか。無我夢中の脱出だった。

阪神淡路大震災を経験した一人として、被災者の方々に精一杯の思いを届けたい。

「あの日」の朝

明け方、突然の突き上げ。

すぐに横揺れが来た。真っ暗な中、壁をもって自分の身体を支えるのが精一杯。

揺れが収まり、外を見る。ブロック塀は倒れ、家が傾いていた。妻は布団の上の落下物で身動きできない。子どもは和箪笥が倒れて隙間に挟まっている。

とりあえず、家族が無事であることを確認した。その後、近くにある実家へ向かう。明かりのない暗がり。

みんなが寝ているはずの二階に上がろうとしたが、何かに邪魔されて上がれない。階段が崩れた壁で塞がってしまっている。

家族や親たちの無事を確かめる。自分の勤め先である市の公民館に向かった。

その途中、まち全体がガス臭い。職場につくとすぐに、まちのひとびとに、「ガス漏れがしている。火の気に注意してください。」と一日中広報して回った。

どこの住居も水道の水が出ない。まちにある公園の水道が出るところがないか探しまわり、やっと二カ所の公園で水が出る水道を発見。

「この水道は水が出ます」と張り紙をした。意外にも、自宅の屋外にあるガレージの低い位置にある水道からも水がでることが分かった。「水が出ます。ご自由に使ってください。」と張り紙を。

ここまでが震災一日目。その後、勤め先の公民館を避難所として開放。無傷であった近くの鉄筋二階建ても避難所として協力してもらう。

自分の気持ちを引き締めるために真っ赤なバンダナをはちまきにし、公民館に陣取った。

しかし、事前に避難所として認定されている所でなかったので、一〇名以上の方が避難されてきたが、市からの援助は一切なかった。

市からおにぎりやパンが届くようになったのはしばらく時間がたってから。避難所として認められれば、以後、確実に弁当などが届いた。

被災者同士の連帯が希望に

避難所での生活が一定落ち着いてきたころ。自分も被災者であるが、被害の酷い、支援のない地域の応援にいくことを決める。

テレビなどのマスコミで紹介された避難所には、全国から多くの支援物資が持ち込まれていた。

一方で、何らの物資も入らない避難者がいることも分かった。

しかし、自分たちには何もない。全国からの救援物資も神戸には直接入らない。周辺の大阪や三田・加西などに物資は集積されていた。

なんとかトラックを確保し、炊き出し用具などを運ぶ。人間は歩いて現地に向かった。現地でうどんやコロッケ、カレーなどの炊き出しを春まで続けた。炊き出し場所に来れない人がいるので、個別の配達を青年たちに担当してもらった。

被災者同士の連帯が、希望を与え、被災者の孤立を防いだのだった。

今回も負けない

阪神淡路大震災は、日本でのボランティア発祥となった。

とくに若者たちが日常の利害から解き放たれて復興に汗する姿は、いきいきと輝いていた。被災者の私たちは彼らに勇気づけられた。

今回の東日本大震災被災者のすべての人々に伝えたい。

「あなたは独りじゃない！」

日本全国・世界中の人々が、あなたのことを気遣っています。そしてみんなが心から応援し、見守っていることを知ってほしい。

全国から、あなたの所に支援に行く。絶対にあなた方のことを忘れてはいない。

阪神淡路大震災の経験から、関西の我々は、第一弾の行動として被災地の支援に行く。

この記事が紙面に載る頃、被災地のみなさんと熱い連帯の絆で結ばれていることを祈っている。

今回も負けない。

巨大地震と津波に見舞われた日本の人々のため、国連は「可能な限りあらゆる支援」を行う、と潘事務総長

＊潘基文（パン・ギムン）国連事務総長は3月11日、下記の声明を発表しました。

世界はけさ、日本から届いた映像に衝撃を受け、悲しみに包まれています。

私は国連を代表し、日本の人々と政府、とりわけ大地震と直後の津波により、家族や友人を亡くされた方々に対し、深い同情と心からの哀悼の意を表したいと思います。

日本はこれまで、最も寛容かつ強力な支援国の一つとして、全世界で困窮する人々に援助の手を差し伸べてきました。

国連は同じ気持ちから、この極めて困難な時期に日本の人々の力となり、可能な限りあらゆる支援を提供する所存です。

太平洋や東南アジア全体で一日中、地震の余波が感じられる中で、私たちはつぶさに状況を見守っていきます。

私は、菅直人首相の指導力、そして国際社会の全面的な支援と連帯のもと、日本の人々と政府がこの困難な時期をできるだけ早く克服できるよう、切に願っています。

（以下、日本語で）*「日本政府と国民に心から哀悼の意を表します。日本がこの重大な試練を乗り越えられると確信しています。」*

安全は　心と時間の　ゆとりから

計画停電に伴う交通事故防止について

計画停電に伴い信号機や街路灯が消えます！

3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震において被災をされた皆さんに心からお見舞いを申し上げます。

また、救援、救出活動にご尽力いただいている自衛隊、警察、消防、海上保安庁、また各自治体、関係各位の非常事態における積極的な活動に心から感謝を申し上げます。

今回の震災により、電力会社による計画停電が3月14日から実施され、公共交通機関へ大きな影響を与え、私たちの日常生活にも大きな変化が出ています。

特に、計画停電が実施される地域では、道路の街路灯や信号機が消え、真っ暗になる状態が続くため、交通事故の多発が懸念される中、3月17日には計画停電中に交通死亡事故が発生しております。

この計画停電は、しばらくの間継続されることが予想されるため、計画停電中に付近を通行する方は以下のことに注意して通行するように心掛けてください。

○停電している地域では、自動車又は原動機付自転車による移動はできる限り控えてください。

○信号機が消えている交差点等に交通整理を行う警察官がいる場合は、警察官の指示に従って通行してください。

○また、交通整理を行う警察官がいない場合には、交差点等の手前で一時停止をして、周囲の歩行者や車両を確認してから、速度を落として通行してください。

○外出前に、電力会社のホームページ等で計画停電が予定されている地域に関する情報を確認してください。

最後に、節電に関する情報を紹介します。

県の幹線道路では、節電のため一部街路灯を消灯や減灯を実施しております。

この影響により、幹線道路の一部で暗く感じる場所がありますので、車を運転する方は、速度を落とすなど慎重な運転に心がけて下さい。特に自転車利用者や歩行者の方は、歩道の狭い場所は譲り合いの気持ちを持って通行するように心掛けていただきたいと思います。

また、テレビ等でも報道されているように、使用しない家電製品のコンセントを抜くなど引き続き節電に努めて下さい。

（県くらし安全交通課）

特定非営利活動法人
アムダ
AMDA
エアメール

世界にひろがるAMDAのネットワーク

東日本大震災・緊急支援活動

ＡＭＤＡの被害日本大災害における緊急医療支援活動は10日目に入った。電気の供給や携帯電話の回線など、徐々に改善が見られ、内陸部では道路状況やガソリンの供給、盛岡駅までの新幹線の再開など少しずつ復興の兆しがうかがえる。

避難所生活は厳しいものであるが、被災者の方たちがそれぞれ協力し合い、辛抱強く、お互い励ましあっておられる姿が多く見られる。

【被災地からの活動報告　岩手県】

釜石市と大槌町で活動を行っているＡＭＤＡ医療チームは、医師、看護師でチームを構成し、ローテーションで診療活動を行っている。大規模な避難所には医師と看護師が常駐し、診療活動をしている。小規模な避難所では、電気自動車などを使っての巡回診療を行っている。釜石市の避難所の方には電気が徐々に復旧してきているが、大槌町の方には電気が通ってないため、避難者の数も多い。

ＡＭＤＡの要請により、総社市から届けられた1500人分の豚汁の炊き出しが実現。釜石中学校、大槌町の避難所で、湯気に囲まれながらたくさんの笑顔に出会うことができた。　岡山から19日に出発した支援物資便も21日の朝に花巻に到着し、仕分けをして徐々に各避難所へ届けられている。

さらに、避難所に暮らす被災者の方への職を提供する意味を含めて、現地でのスタッフの雇用も始めた。これにより、さらにきめ細かく、活動が行うことができると見込まれる。

【被災地からの活動報告　宮城県】

南三陸町の「平成の森」で、診療活動を行っている医療チームによると、21～22日の3日間で113人の診療を行った。60歳以上の患者が多く、高血圧、腰痛、口唇ヘルペス、花粉症などの症状が多い。てんかん、統合失調症の患者さんも数名。22日までは「平成の森」での活動を行い、23日からは、志津川小学校、志津川中学校　などの避難所で、すでに活動をしている地元の開業医をサポートしながら避難所での診療を行う。さらに、23日には東京ヘリポートより第十一次の派遣者５名が医薬品とともにヘリコプターで南三陸町へ入り、すでに活動を行っているＡＭＤＡ医療チームと合流し、被災地の支援を行っていく。

【３月23日出発 第十一次派遣者　計5名】

9：00JR新木場駅 集合 10：00 江東区新木場 東京ヘリポートで離陸宮城県南三陸町へ計5名

■山田 徳久（やまだ のりひさ）：医師、愛知県在住　＜活動場所：宮城県南三陸町＞
■天田 大輔（あまた だいすけ）：内科医師、埼玉県在住　＜活動場所：宮城県南三陸町＞
■伊藤 雄二（いとう ゆうじ）　：医師、東京都在住　＜活動場所：宮城県南三陸町＞
■鹿島 彩女（かしま あやめ）　：看護師、保健師、東京都在住　＜活動場所：宮城県南三陸町＞
■村上　拓（むらかみ たく）　：医学生、調整員補佐　岡山県在住　＜活動場所：宮城県南三陸町＞

3月23日までの派遣者予定数（3月22日現在）

医師21人　看護師9人　助産師2人　准看護師1人　薬剤師2人　調整員（補佐含む）21人

計56人

【皆様からの募金を受け付けております】

郵便振替：口座番号01250-2-40709
口座名「特定非営利活動法人アムダ」
＊通信欄に「東日本大震災」もしくは「131」とご記入下さい

【お問い合わせ】

AMDAボランティアセンター　TEL：086-252-7700　　FAX：086-252-7717
〒700-0013　岡山市北区伊福町3-31-1　　e-mail： member@amda.or.jp　　http://www.amda.or.jp

国連加盟国の国旗

国連本部ビル

世界水の日（3月22日）に寄せる 潘基文（パン・ギムン）国連事務総長メッセージ

世界がより持続可能な未来像を描こうとする中で、水、食料、エネルギーの間にある重要な相互関係は、私たちにとって最も大きな課題の一つとなっています。水がなければ尊厳も、貧困からの脱出もありません。ところが、水と衛生に関するミレニアム開発目標は、多くの国々で達成が最も危ぶまれているのです。

今後ほぼ一世代の間に、世界人口の60%は都市部に暮らすことになりますが、こうした人口増加の多くは、開発途上地域のスラム街や、無断居住者地域で起こっています。今年の世界水の日のテーマ「都市のための水」は、こうした都市化に伴う将来的な需要課題のいくつかにスポットを当てるものです。

都市化は水管理の効率化や、飲料水と衛生施設へのアクセス改善の機会をもたらします。その一方で、都市では問題が増幅されることも多く、私たちの解決能力は今のところ、そのペースについてゆけていません。

過去10年間で、自宅でも近隣でも蛇口の水を利用できない都市住民の数は1億1,400万人、最も基本的な衛生施設を利用できない人々の数は1億3,400万人、それぞれ増加したものと見られます。この20%に上る増大は、人間の健康と経済の生産性に大きな悪影響を及ぼしています。すなわち、人々が病気にかかり、働けなくなっているからです。

水に関する課題はアクセスの問題にとどまりません。多くの国々では、衛生施設がないために女児が退学を余儀なくされたり、水汲みや公共トイレに行こうとする女性が嫌がらせや暴行を受けたりしています。しかも、社会で最も貧しく、弱い立場に置かれている人々は、水をヤミ商人から購入せざるを得ないことが多く、その価格は、水道が通る比較的裕福な地区に住む人々が支払う価格を20%から100%上回っていると見られています。このような現状は持続できないだけでなく、許すこともできません。

水の問題は、2012年にリオデジャネイロで開催される「国連持続可能な開発会議（リオ＋20）」でも重要な議題となります。「地球の持続可能性に関するハイレベル・パネル」とUN-Water（国連水関連機関調整委員会）は、貧困と不平等の削減、雇用の創出、および、気候変動と環境ストレスのリスク極小化のために、私たちがいかにして水、エネルギー、食糧安全保障という点を線でつなげるかを検討しているところです。

世界水の日にあたり、私は各国政府に対し、都市の水危機を単なる水不足ではなく、あるがままの形で、すなわちガバナンス、政策の不備、そしてずさんな管理がもたらした危機として認識するよう強く促します。また、私たちも、貧困層向けの水と衛生への投資が減少している現状を食い止め、逆に増加させることを誓おうではありませんか。そして、この豊かな世界で依然として、尊厳ある健康な生活に必要とされる安全な飲み水も、衛生施設も持たない8億を超える人々の苦境に終止符を打つという私たちの決意を新たにしようではありませんか。

（広報資料）

の現場から

横浜国際人権センターの活動の一つに人権移動教室というのがあります。人権移動教室では、医師達が人道援助を行っている「アムダ」や「国境なき医師団」の活動の紹介を通して、命の大切さや心配りなどについての講演を行っています。一九九四年秋よりこの活動は開始され、今までに訪れた学校等の総数は一七六〇校を超えています。移動教室に参加した学校の子どもたちからは、多くの感想文が寄せられています。中には思わず「ハッ」とさせられるような鋭い意見や、逆に微笑んでしまうようなものが多くあります。『移動教室の現場から』では子ども達の生の声を皆さんに紹介しています。

※写真は本文の感想文とは関係ございません。

大和市立引地台小学校　5年生　女子

今日、私は人権ということについて、初めてしりました。最初は、人を助けるだけかと思いましたが、人に大切なことを教えるということも、仕事の一つということが分かりました。杉とうさんの話は、一つ一つがみんなに伝わる話でした。世界中の人にきいてもみんな同じ答えが、かえってくる1つ目は、死にたくない。2つ目は〝幸せ〟です。杉とうさんは、学校に行くことは幸せだ。といっていました。そのことに私はこう思いました。友達がいなければ、喜ぶことも悲しいことも楽しいことも嬉しいこともないと思いました。今日は、心に残るお話しをたくさんしてくれてありがとうございました。

横須賀市立大津小学校　5年生　女子

今日から人をたいせつにしようと思ったし先生のビデオを見てむずかしい言葉がいっぱい出てきたけど人は人をささえていかなきゃ生きていけないのは、しっていたつもりだったけど杉藤先生の言葉が一つ一つ心にひびきました。先生のそのせっとくりょくがすごいなーって思ったし、命の大切さをしりましたし。先生の話の中にでてきたニューヨークの人を見ならって人にやさしくしてみようと思いました。

今日の45分かんのみじかいあいだでしたが、どうもありがとうございました。

移動教室支援企業

電気保安法人　**株式会社メガ**

横須賀市立大津小学校　5年生　女子

今日は、きちょうな話をありがとうございます。私はこの45分間で、人を大切にしようと、改めて思いました。特にアフリカなどでのボランティア活動に、ジ～ンとしました。「自分がやらないと（助けないと）、みんなが幸せにならない！だから、自分が今、やらなきゃいけないんだ!!」ということを、私は思いました。私は杉藤さんのように、みんなに今日の話をし、ボランティアのすごさを、分かってほしいと思います。ありがとうございました。

横須賀市立大津小学校　5年生　女子

今日、（9／24（水））杉藤先生のお話をきいて、人権という言葉の意味が分かりました。ニューヨークのお話はとてもすばらしい、そう思いました。飛行機をおりてから家に帰るまで…。このお話を聞いて、私も電車やバスで、人を助けたいと思います。ビデオを見たら、日本は「とてもゆたかな国だなぁ」そう思いました、いろいろな国を見て、「幸せは人々の思いやりで生まれる」そう思いました。杉藤さん　ありがとうございました♪

横須賀市立大津小学校　5年生　女子

私は今日、話を聞いて、改めて人の命を考えたいと思いました。MSFのビデオを見て、今すぐにMSFの人みたいにはなれないけど、これからは、人の役にたてる人に少しずつでも、なりたいと思います。

いじめをなくす為の「人権移動教室」を支援する会に、皆様のご入会をお待ちしております。くわしくは事務局まで　TEL.045-261-3855　FAX.045-261-4030

移動教室

人に優しくすれば、自分の気持ちから、しあわせになれると思ったから、少しずつでも役にたちたいと思います。

今日は改めて、人の命の事をくわしく話してもらいありがとうございました。

横須賀市立大津小学校　5年生　女子

こっきょうなきいしだんのことについて、お話しを聞けて自分も、もっと命や、やさしさ思いやりについて、大事にしなくちゃいけないな。と思いました。杉藤先生の体験した話も、4～5才の子が、先生に気づいて、「行っちゃダメ！」（？）と言ってとめたことは、人に対してのやさしさがすごく、伝わってくることだな。と感じました。私も、電車やバスで2、3回やったことがあるので、もっとこのことを、続けていけたらいいなと思いました。

横浜市立港南台第一中学校　1年生　女子

本日はありがとうございました。とても興味深いお話が多かったです。

「国境なき医師団」は知っていましたが、そこまで危険な状況で働いているとは知らず、ただただ「世界の人々につくす立派な人たちの集まり」としか知りませんでした。

命をかけて他の人を救う。それもボランティアで。おそらくよっぽどの信念と決意がないとできないはずです。その信念、決意、思いにとても感動しました。

ビデオは見ているのが怖くなるほどリアルでした。もちろん現実を録っているのですからリアルに決まっていますが、今もこの世界のどこかで全く同じことが起こっているのかと思うと、本当にゾッとしました。

「世界の人々がみな願うことは、生きることと幸せになること」この言葉に私はなるほどと思いました。また、「その二つの権利のことを人権という。人権をつきつめればこの二つに行きつく」というお話にはなんだかスッキリしました。実の所、私も人権とは何だろうと思っていたからです。

今日の話でいちばん印象に残ったのは、「何も考えなくても動ける人になること」です。私はその言葉のとおりになりたいと心から思いました。これからはもっと周りに目を向け、困っている人を見つけたら手助けを自分からしたいとも思いました。

今日のことも他の人、家族や他の学校の知り合いにしたいと思ったし、知らない人々にも私は支えられているということは絶対に忘れないようにしたいです。

ニューヨークでの話には私もおどろきました。おそらく日本ではありえないでしょう。私もアメリカに一時期住んでいました。私はとても小さかったので、母からきいたことですが、みんなとても優しかったそうです。特に体がご不自由だったり大変だったりする人には。私が思うに、日本には思いやりが少なくなっているように思います。もっと人のことを考えた行動をしなくてはと思いました。

今日は本当にありがとうございました。杉藤先生が長生きして、幸せになって、他の人にも人権の大切さをもっと教えられるよう、祈っています。ありがとうございました。

横浜市立港南台第一中学校　1年生　男子

今日の講演の結論として人権とは、身近な人のことを本当に考え、自ら行動することから始めれば守ることができる、ということでした。実際、不自由な方やお年寄りにやさしくすること以外にも、周囲の人が楽しく暮らせるように、教室の窓をあける、電気をつけるなど身近なことも人権を守ることにつながると思います。しかし今の学校生活では、黒板を消す係、電気をつける係など、ほぼ全ての行動の役割が決まっています。授業がスムーズに進むなど、多くの利点もありますが、自主的に行動できることがとても少なくなってしまっています。また、このように係が決まっていることで、「何でとりに行かない」や「お前の仕事なんだから自分でやれ」などと、自分はやる必要などない、と思っている人が多くなり、責任を押しつけていることがとても多く感じられます。

また、人権とは、人間が人間らしく幸せに生きるための権利です。ですが、もちろん人は、自分の思いどおりに行動しようとしたくなります。しかしその欲望は大きくなるほど、人の命や地球の財産をうばっていきました。それをおさえるためにあるのが人権だと思います。しかし、自分の人権を守ろうとすると、人の権利をうばってしまうことがあります。僕は、人権とは、幸せにいきるための権利ではなく、人を幸せにできるようにするための義務だと思っています。こうすれば、自分は人を幸せにする、人は自分を幸せにしてくれると、つじつまが合い、また、おたがいを絶対に守らなければならないという意味になります。なので僕は、人権とは、人間を幸せにするための、人間の義務だと思います。

横浜市立港南台第一中学校　1年生　男子

杉藤さんの話を聞いて、「人権」に関する様々なことを僕達に教えて下さいました。

僕は、「人権」ということを聞いても、あまりピンと来ませんでした。でも、今日の話を聞いて、

の現場から

「死にたくない」と、「皆が幸せであること」の二つから成り立っていることが分かりました。勉強は大学で終わるが、「人権」は死ぬまで勉強し続けることだと言ってました。確かに言われてみればそうだなと思いました。

そして、「人権」の無い戦争へ行く、「国境なき医師団」のビデオを見ました。災害、戦争などの出来事で犠牲になった人たちや、ケガをした人達を救っている姿が、素晴らしいと思いました。しかも、それをボランティアでやっていることが、すごいと思いました。過酷な状況にもかかわらず、必死で頑張っている人たちに、感動しました。

杉藤さんは、「困っている人がいたら、自然に体が動くぐらいになって欲しい。」と言っていました。杉藤さんは、ケガをしている時にアメリカに行き、空港や飛行機内で様々な気遣いをされたそうです。僕も、電車やバスの中で困っている人を見かけたら、自分から勇気を出して助けてあげたいです。

今回の杉藤さんの話を聞いて、僕も「人権」について考えてみようと思います。夏休みの宿題で、「人権」に関する作文を書いて、あまりピンと来ませんでしたが、今はもう大丈夫だと思います。杉藤さんの言っていることは、とてもわかりやすく、自分のためになる事ばかりで、とても勉強になりました。

僕もこれから、「人権」を大切にしていき、世界中の68億人の全員が幸せでいつまでも暮らしていける日を願っています。

杉藤さん、ためになる話を、ありがとうございました。この話は、世の中のためになると思います。

横浜市立港南台第一中学校　1年生　女子

私は、杉藤さんの色々な話を聞いて気持ちが温かくなったり、考え直したりすることがたくさんありました。ニューヨークに行った時の話、MSFの活動についてのビデオを聞いたり見たりしてとくに印象に残ったのが杉藤さんがお話ししてくれたニューヨークの出来事です。そして、5〜6歳の女の子が優しくしてくれたと聞いて私より年下なのにしっかりしているなと思いました。

そして杉藤さんの話を聞いて、優しさとは自分ががまんして人のためにつくすものとはちがうと思いました。私は今まで人に嫌われないために、自分はいつもガマンしてつらい思いをして、笑顔をふるまっていました。でも、それだけでは自分自身が幸せになれないと今回実感しました。まちがっていることは、まちがっている。良いことは良いと、めりはりがしっかりついている人間になろうと思いました。その優しさは杉藤さんが言ったように日常生活からついていくことなので、しっかり自分を見直したいと思います。

最後に、今日はたくさんのお話しを聞かせてくれてありがとうございました。改めて「人権」ということを考え、恥ずかしくない人間になろうと思いました。杉藤さんも日本のため、世界のためにこれからもがんばって下さい。

横浜市立港南台第一中学校　1年生　女子

私は、今回人権の話しを聞いて、日頃の私は、人にやさしくできているかな?と、改めて考えさせられました。

日頃の私は、人権を尊重をできているかな…。もし、私が、私の気付かないうちに、尊重している事も、しんがいをしてしまっているのかもしれません。だから、今日かぎりで、人を傷付ける事は言うのもやめます。そして、なにより、人にやさしくして行きたいと思っています。

MSF（国境無き医師団）の活動をVTRで見させていただいて私も、大人になったら、困っている人を助けたい。こういう人たちのように、多くの人を命をかけて救いたいと思います。実は、私は昔から「誰かがやらなくてはいけないのなら、私がやりたい」そう思っています。友達に、そう言うと、笑われてしまいましたが今日、杉藤さんのお話しを聞いて、この言葉があったので、少しうれしくなりました。私のように考えてくれている人たちがたくさんいたなんて…。そんな気持ちで胸がいっぱいになりました。もし、今、地球がほろびる…。だが一人がぎせいになれば、地球が助かるのならば、私は進んでたった一人のぎせい者になります。私は、周りのたくさんの人々が笑顔で幸せに暮していけるのなら、私もそれで幸せだからです。

「人権」は、深くって広くって、世界の人の数だけ違う考え方のある、大切で、人と人との結びつきで、暖かいなぁ…と、思いました。「幸せと命を守る」いくら難しくたって私たち中学生にだってこの2つは、分かります。それに、今から、今日から始められる事は、なにげないこの日常にあふれているのです。ほんの少しだけ、見方をかえれば…ほんの少しだけ、やさしさという勇気をだせば…世界はもっとやさしく、素敵な物になっていくと思いました。

杉藤さん、今日は、本当にありがとうございました。今回の話しの中に…

「今日ここで会ったのは、ぐうぜんで、二度と会う事は、ないと思う。」そう言っていました。だけど私は、この出会い、ぐうぜんでは無いと思います。きっと私たちに、人権の大切さをおしえて下さるために、神さまが、あたえてくれた、奇跡で、運命だと思います。なので私は、この、奇跡、運命の中で学んだ、人へのやさしさを忘れずに、これからは、生活して行きたいと思っています。いつか私は、絶対に、困っている人を助けられる大人になるので、その時はまた、杉藤さんのお話しを聞かせて下さい。お願いします。私も、今日、見つけた夢に向かって、小さな事から、コツコツと、体がかってに動くようになるまで、たくさんの事をがんばりたいと思っているので、杉藤さん、そして、MSF（国境なき医師団）のみなさんも、たくさんの人を助けるためにがんばってください。

横浜市立港南台第一中学校　1年生　女子

私は、そもそも人権というものが何なのか、よく分かりませんでした。人権作文をかけと言われても何をかけばいいのか分からないという状況でした。しかし今日、杉藤さんの話を聞いて、人権について、分かった気がします。

「命」と「幸せ」というのは確かに誰もが大切にしているものだと思います。そして、その権

移動教室

利を人権というのです。今まで難しく、よく分からなかった人権も、少し簡単になった気がし、少し分かった気がします。杉藤さんがおっしゃっていた、人権を大切にすることは、他人も大切にする、ということが分かりました。確かに、自分一番で自己中心的な人は、将来、幸せになれないと思います。反対に、人のことをよく考えて気づかいの出来る人は、将来とても幸せになれると思います。私は将来、幸せになりたいです。それは、みんなが思っていることだと思います。そのために、人のことを考えることが大切なのであれば、将来幸せになりたいと思っている人みんなが、人のことを考えればいいと思います。そして、みんなが考えるようになったら、戦争もなくなるし、平和な世の中になると思います。

私は今までに、体の不自由な人にあっても、「あ、この人、体の不自由な人だ。」と思うくらいで、何も考えていませんでした。でも、そんなことをずっと続けていたら、幸せになれないと感じました。これからは、まず話しかけてみる、ということから始めようと思います。そして、最終的に、自然と体が動けるようになれたらいいです。

他にも、友達との言葉づかいも気をつけようと思います。何か、悪いことをしていないか、もう一度、ふり返ってみます。そして、「ありがとう」や「ごめんね」といった一言も大切にしていきます。

自分と向き合うということは、とても大変ということも今日、分かりました。今後は、自分と鏡を通して話し合ったり、自分を、他人と見てみたりして、向き合おうと思います。私は前、本で「この世の中で一番分からないものは自分なんだ」という一文を読みました。そして今日、杉藤さんの言葉を照らし合わせてみると、やっぱり、自分で難しいと思いました。でも一人ひとりが自分と向き合うことで、人権についても大きくかかわってくると思います。

最後に、私は杉藤さんの話をきいて、二つ目標をたてました。一つ目は、人のことを大切にする、です。もう一つは、もう一度、自分を見つめる、です。私は、この目標に向かい、今日から頑張っていこうと思います。

大和市立引地台小学校　保護者

『人権教育』に興味深く参観させていただきました。

”人権って何？“と問われても我が子にきちんと説明できなかったので、先生の貴重なお話しを伺い、家に帰ってからも子どもと一緒に振り返ることができました。「お母さんね、スーパーのレジで前に並んでいたおばさんがお財布からカードがみつけられずにまごまごしていて ”はやくしてよ～“って思ってイライラした事があるの。それって自分のことしか考えていなくていけなかったよねぇ…。もしかしたらそのおばさんにも何か訳があったかもしれないしね…。」「他人を思いやることって難しいけれど大切なことなんだよね」というような、今まで家庭ではしたことがないような話題でした…。

そして他人への心配りができる子どもになるのには、親の関わり方も、自覚をもたなければいけないな…と改めて思いました。色々な人達に助けてもらいながら自分は幸せに生活できていることを忘れず、感謝の気持ちを抱いて過していけたら素敵なことですね。

本日はありがとうございました。

横須賀市立大津小学校　保護者

重い内容のお話とＶＴＲで、子供たちはどう感じているだろう？と気になりました。

国境なき医師団も人なら、虐殺するのも人、生まれた国や立場で育ち方があり、思想の根底が決まってしまう。選択の余地なくその場に置かれていた人々のことを思うと何とも言えない気持ちになり、胸が痛みました。誰もが幸せになりたいと思っているはずなのに。

日本に生まれ、安全で物にあふれ、何不自由なくすごせることは、あたり前ではないこと、感謝すべきであること等、改めて家族で話しました。

ＶＴＲは子供たちにピンとこない部分もあったかもしれませんが、同じ地球の上でこういう現実があること、命の大切さはわかったと思いますし、杉藤先生の体験談から、まずは身近な小さな親切をしていくことが、どれだけ大切で意味のあることなのかはわかったと思います。

親やまわりの大人たちが、普段から自然におもいやりの心を持ち、親切にしている姿を見せていれば、自然と子供も身についていくでしょうし、折にふれ、ボランティアとは、親切とは、思いやりとは何かということを家庭や学校で話していくことも大切だと思います。

ありがとうございました。

大和市立引地台小学校　教諭

杉藤先生、貴重なお話を伺うことができ、ありがとうございました。

先生のお話を伺って思ったことは ”つながり“ でした。人は、何らかの形で人とのつながりをもっています。家族、友人、学校、地域の人達等、いろいろな人とつながっていることは、子ども自身も分かっていますが、そのつながりを実感できない子どもも少なくありません。孤独、孤立した心。心のつながりを実感できない子は、自分を大切にしようとは思わないようです。今、クラスでは、人の痛みや悲しみを感じられる人になってほしいと考え、”自分も友達も大切にしよう“という目標をたて、友達のよさや優しさが毎日の生活の中で伝わるように意識をもたせています。子ども達を見ていて、よさを互いに認め合い、まとまっていくエネルギーの強さを感じます。が、そのエネルギーは、相手を批判、避難し、排除しようとするマイナスの感情にふれてしまう危険性があります。そうならないためにも毎日の小さな成功体験の積み重ねが大切と考えます。失敗してもけんかになってもどうしたらよいか考え、修正していく力が必要です。先生のお話や子ども達を見ていて、考えました。やはり人権は、まず自分を大切にすることから始まると思います。そして、自分だけではなく、周りの人達ひいては、世界の人達が幸せに暮らせる社会の一員として、自分にできることを考え、行動にうつせる人を育てていきたいと考えています。本当にありがとうございました。

大地震と放射能汚染

三谷　誠

大地震発生

三月一一日、外出先から帰って玄関を開けようとしたら、ミシミシと音がして家がゆれている。外と中、どちらが安全かと少し迷ったが、家の中に入った。ゆれはなかなかおさまらず、買ったばかりのテレビが踊っていたので、あわてて押さえ込んだ。ついでにスイッチを入れる。東北地方の大地震を報じていた。約三〇分後、上空からの津波中継となる。点在する住宅、整然と駐車していた車、船などが黒い海水に流され、きれいに耕された田を覆う。財産が一瞬のうちにゴミになっていく。おそろしい生中継である。神奈川県庁の外壁も一部落ちたそうだが、東京と神奈川の県境にある我が家に、被害はなかった。その後なぜか、計画停電にも遭っていない。

福島第一原発は、放射能を撒き散らしている。わたしたちが人智でコントロールできないものに頼っていたことを、改めて感じさせる。日本は核汚染国となり、多くの外国人が日本を離れた。

天災と人災・原発の危機

これを書いている三月二五日現在、まだ原発への放水が続いている。想定外、未曾有の巨大地震だったというのが東京電力や原子力安全・保安院など、まだ原発を推進したい者たちの強調するところである。マグニチュードは二回修正され、9になった。これは地震の規模であり、局地的なゆれの強さではない。「阪神・淡路」のときのように、鉄筋の建物が倒れ、重い家具が室内をとび交ったという話は聞かれない。つまり、規模は大きかったが局地的なゆれは未曾有ではなかったみたいだ。津波も非常に大きかったが、鉄筋の建物の倒壊は、二、三棟という報道だった。原発は、水素爆発などが起きるまでは壊れたようには見えない建屋の中に存在していた。ディーゼル発電装置は「津波なんて関係ない場所」に設置されている、と力説する学者もいた。それはそうだろうと思う。原発は多重防護機能が働くようになっている、はずだった。

農作物の汚染被害も広がっている。政府は、実際に汚染されているのに、「風評被害を防げ」と言う。これからは野菜やウナギなども中国産のほうが安全、になるのかもしれない。原発の是非はともかくとして、「大きな地震で原発が自動停止した」。ここまでは天災だとしても、それからの忌まわしい出来事の数々は、人災だろう。利権まみれの原発を推進した政治家、学者、東京電力、東芝、日立などの責任は重い。「原発許すまじ」の前に、原因者でありながら被爆とは無縁なところにいる彼らを追及する必要がある。そもそも原発の役割はお湯を沸かすことで、周辺の広大な土地や海を犠牲にしてまで設置するほどのものではない。電力は原発に頼らなくても、ほとんど足りている。ただし、夏の高校野球のときだけ、原発がなければ供給不足の恐れがあるという。危険を冒すほどのことはない。節電すればいい。

各局とも震災報道がほとんどだった三月一六日、テレビ神奈川は、県議会予算委員会を放映していた。震災前の収録だが、歴史的建物の本庁舎で議員はすでに通告済みの質問を読み上げ、職員挙手。「議員おっしゃるとおり、県といたしましては・・・」などとあらかじめ用意の紙を読み上げる。相変わらずくだらないことを大真面目にやっていて、悲しい。大震災で大変なときに税金使った、たわけた番組を流している。

素朴な疑問

・ホウレンソウなどの汚染は「暫定基準値」を超えてもただちに健康に影響せず、毎日一キロ一年間食べてもCTスキャン一回分より少ない被爆量だという。「暫定基準値」とは？。このことは、CTスキャンの危険性を意味していないのか。

・「地震予知連絡会」の目的は何だったのか。

・原発の発電単価は火力、水力にくらべ安価と宣伝してきたが、どういう計算だったのか。

・福島第一原発作業員の被爆上限量を、急遽二・五倍に設定してよいのか。

・原子力安全・保安院の説明者が何かを隠しているように見えるのは、なぜか。

心配なことはたくさんある。次回からは本誌の読者とともに、「安全な食のための実践」などについて考えていきたい。

ネット社会と人権

横浜国際人権センターあすかブランチ
代表　中野　博章

娘からの緊急メール

「怪我なし、避難中」

仙台に住む私の娘から突然のメール。何だろうとびっくり。

外出していた私は、最初、意味が分からず戸惑った。ケータイ・サイトの「ニュース速報」を見てメールの意味を悟った。

その後は音信不通。心配は極みに達した。二日目に偶然にも一回だけ携帯電話がつながり、被災状況が分かった。「住居は水没したが、娘夫妻は何とか脱出。被害が軽かった夫の実家に身を寄せている。」とのこと、ひとまず安堵。

娘婿の親族も含め多くの人々が消息不明。ライフラインの復旧めどがたたないという。

今は「携帯」が娘と私をつなぐ唯一のツールであることは確かだ。

情報間格差のなかで

今から十数年前のこと。

当時の首相の肝いりで始まった「ユビキタス・ネット社会」の構築は、最優先事項の国策としてネット環境等の基盤整備が急速に行われた。その結果、「いつでも、どこでも、なんでもかんでも」が、電子空間上のネットワークにつながる社会が現実のものとなる。

しかし、情報が集まるところには膨大な情報が集まり、その一方で、「情報を入手する手段を持たない」人々には情報がまったく集まらず、高度技術情報社会から実質的に排除されるという事態が起こった。

つまり「デジタル・デバイド（情報間格差）」が顕著化しつつある。

これらの「情報」の中には個人のプライバシーなど、非常にデリケートな個人情報も含まれている。

ところが、ネット上で自分の個人情報が漏れていても、それさえも知らない人たちが数多く存在する。

まさに、人権問題そのものだ。

ネットの便利さと情報の氾濫

インターネットの普及で、私たちは、「人類が未だ経験したこともない状況」に直面している。

一方で、これまでの時代には想像できなかった「便利」を手に入れている。多くのマイナス（危険）も引き受けさせられた。

特定の地域や個人、特定の外国籍の人々を標的にした、人権侵害や差別情報の氾濫。許しがたい事態だ。

しかもその内容が年々、巧妙かつ悪質化している。子どもを取り巻くケータイ・サイトも同様。

ネット使った新たな人権侵害

このような状況に危機感を抱いた私は、「インターネットと人権」に関する活動を始めた。

以来、この十数年、電子掲示板上の誹謗中傷や差別書き込み、学校裏サイトの「ネットいじめ」。地図情報の提供サービスによるプライバシーと人権の侵害に注意を払ってきた。

更に、これらの問題に加え、動画投稿サイト上にも悪意に満ちた差別を煽る映像や画像が掲載されるケースが起きている。

また、「電子書籍」の登場で、著作権が消滅した書籍類がデジタル化されたために差別表現が復活。

その多くは戦前の著作物であるため、当時の時代背景からして、人権への配慮がなされていない。そのために、障害者、被差別部落、ハンセン病、アイヌ民族、アジア諸国などに対する偏見に満ちた表現が記述されたまま。これらが野放しといえる状態になっている。

いま、私が最も懸念することは、ネットが人権侵害のツールとなってしまう危険性をはらんでいるということだ。

ネットは幸せのツール

「怪我なし、避難中」の娘からのメールで、私は彼女の危機を知ることが出来た。ネットは大切な娘の安否を確認するツールになった。

情報が遮断された被災地の混乱を見ればネットの大切さが分かる。

だから本来、ネットは人と人を結び、幸せにするためのツール。

このような、ネットのプラス面に対し、マイナス面のネットによる人権侵害が横行している。

「人権」の視点で、ネット社会の今後を見直す必要がある。

月刊　第194号　平成23年4月20日　（昭和61年10月30日第三種郵便物認可　郵－第2039号）　1部500円（毎月20日発行）

「語る・かたる・トーク」通巻Vol.194
2011年4月20日発行
国連NGO 横浜国際人権センター発行　発行人／杉藤旬亮　印刷／朝日オフセット印刷株式会社
〒231-0063
横浜市中区花咲町3―98エミネンス紅葉坂101
Tel 045・261・3855（代）
http://www.yihrc.jp
e-mailikikikirakira@yihrc.jp

いま、できることを。

これからも、私たちにできることを。

東北関東大震災の義援金にご協力ください。

国連NGO 横浜国際人権センターは、「東北関東大震災」への義援金を募っています。
お寄せいただいた義援金は日本赤十字社を通して被災地の支援にあてられます。
詳しくは、横浜国際人権センター事務局までお問い合わせ下さい。

【振込み先】　横浜銀行　本店営業部（普）1697639
横浜国際人権センター 会長　杉藤 旬亮（すぎとうじゅんすけ）

国連NGO
横浜国際人権センター

無断転載厳禁